

国際協力

JICA駒ヶ根

特集

開発教育支援

世界がわかる 自分が見える

～JICA駒ヶ根・開発教育支援事業～



経済のグローバル化が進み、地球規模の課題が増える今、私たちの生活を見通すためには世界全体を視野に入れることが欠かせません。このような中、学校など教育機関は、開発途上国が抱える貧困問題、環境などの地球規模の問題、日本とのかかわりや援助の役割などをテーマとした開発教育を行っています。JICA駒ヶ根はこれらの機関に講師の派遣、題材提供等、様々なサポートをしています。今回の特集はこのサポート事業「開発教育支援」。まずは、この事業を積極的に授業に取り入れている長野市立篠ノ井西小学校の取り組みをご紹介します。

長野市立篠ノ井西小学校 教諭 くらしま さよこ 倉島 佐代子 さん

本校では「互いにちがいを受け止め、認め合い、共存できるなかまづくり」の理念の下、平成18年度にJICA長野県国際協力推進員の方の協力で6年生対象の国際理解教育を立ち上げました。今年度も推進員の小林論子さんの指導を受け、6年全員153人を全世界の人口に置き換え、体を動かしながら識字率・貧富の差など世界の状況を知る異文化体験ワークショップ「世界がもし153人の村だったら」を実施。また、小林さんが青年海外協力隊員として赴いたガーナの様子と活動のお話、ガーナの食文化を知るバナナチップスの調理実習など、様々な取り組みを行うことができました。

「153人の村」で実施したアメ玉を富に見立て、世界の現状に即して分配するワークショップでは、「日本は（国土が）小さいのにもらいすぎ」「一人一つ手に入れるためには戦争で奪う」など、子どもたちは素直な気持ちで世界の状況をとらえていました。また、「ガーナの子どもは勉強ができるだけで幸せなんだなあと思いました。私たちは『勉強なんてやだな』とか『学校行きたくない』とか、すごくぜいたくなことを言っているんだと思いました。『当たり前』と知っていることが、一番考えなければならない大切なことだと思いました」と自分の姿を振り返る子ども。そして「国際支援の仕事をしてみたい」と将来の夢を持つ子ども…。



▲全校での取り組んだジャンベ（アフリカ太鼓）体験

JICAボランティア経験者と出会い、継続して一緒に学習したことで、単に国際理解の知識を学ぶのではなく、ボランティアの熱い思いを感じ取り、国や文化を超え、人のつながりの大切さを学ぶことができたと思います。これからも、人と出会って学ぶ国際理解教育を推進していきたいと思えます。

TOPICS

開発教育支援特集	P1～3
駒ヶ根訓練所30周年シンポジウム	P4
訓練所の1日	P4
お国自慢レシピ	P5
みなこいワールドフェスタ開催	P5
長野県出身ボランティア 奮闘レポートリレー	P6
出発コメント	P7
国際協力推進員紹介	P7
お知らせ	P8

開発教育支援 アラカルト

●JICA駒ヶ根訪問学習

青年海外協力隊、シニア海外ボランティアが派遣前訓練を行うJICA駒ヶ根は、みなさんの訪問を随時受け付けています。JICA事業概要、協力隊体験談、異文化体験ワークショップなどを通じ国際理解を深めます。訓練中はボランティアとの昼食懇親会も可能です。

●中学生・高校生エッセイコンテスト

全国の中高生を対象に、途上国の現状と国際協力の必要性について理解を深め、日本が、そして一人ひとりがどう行動すべきかを考えたエッセイを対象としたコンテストです。

国際協力の理解を深める方法は一つではありません。JICA駒ヶ根の訪問学習、JICAボランティア経験者の講師派遣、中高生対象のエッセイコンテストなど、選択肢は様々です。これらを組み合わせた実践例もあります。主なメニューを紹介します。

●国際協力出前講座

JICAボランティア経験者や職員らを講師として派遣し、途上国の話や活動体験談などを行います。「海外の料理教室」も人気のメニューです。



▲出前講座で、中米の料理に挑戦中！

●教師海外研修プログラム

開発教育・国際理解教育に興味のある先生を対象に、約10日間、途上国で研修を行うプログラムです。帰国後は、研修での経験をもとに、それぞれの現場で国際理解に関する授業を展開していただけます。

◆JICA駒ヶ根訪問、そしてエッセイコンテストへ



▲訪問学習で国際情勢の理解を助けるワークショップを行う仁科台中学校の生徒たち

「途上国のためにボランティアをしている人がいることを生徒たちに知ってもらいたかった」。こんな思いから、大町市立仁科台中学校の業田若菜先生は2009年9月のJICA駒ヶ根訪問を企画しました。

当日、訓練中のボランティアとの昼食懇親会や協力隊経験者の体験談などを通じ、国際協力活動の一端に触れた生徒たち。「外国の出来事にもっと目を向けるようにしたい」「小さなことでも、できることがあれば協力したい」などの感想が寄せられました。

そして、その思いは「中学生・高校生エッセイコンテスト」の応募へとつながります。「JICA訪問で学んだことをまとめるためにも、絶好の機会だった」と業田先生。「訓練所を訪れて生徒たちははるばる刺激を受けた。また企画したいです」と話してくれました。

人口比で日本一の応募数達成!!

2009年度 JICA国際協力中学生・高校生エッセイコンテスト

今年で48回目を迎えたエッセイコンテスト、今年度は「行動～地球と私のためにできること～」をテーマに6月から約3ヶ月間、作品を募った結果、全国から73,531点(中学生49,080、高校生24,451)の応募がありました。長野県内からは中学38校、高校9校の参加があり、作品数は2,896点(中学生1,830、高校生1,066)で、人口比全国一となりました。

現在、最終審査を実施中で、1月中には各受賞者を決定し、2月末に東京の地球ひろばにて表彰式を実施する予定です。結果はJICA駒ヶ根のホームページにもアップします。

世界を考えるきっかけになるエッセイコンテスト。次回もたくさんの方の応募をお待ちしています!

◆途上国の経験を教室に ～JICA教師海外研修レポート～

こばやし ようこ
駒ヶ根市立赤穂東小学校 教諭 小林 葉子 さん



▲ダッジス小中学校での授業の後、児童と交流する小林さん (左から2人目)

私の学級では4月から「海外貧困問題」を学習しています。子ども達は映像や写真、話から貧困の現状を知り、「私たちにできることは何だろう」と考えました。答えはなかなか見つかりませんでした。

そんな時、JICAの教師海外研修の存在を知り、フィリピンを訪れる機会を頂きました。フィリピンのネグロス島にあるダッジス小中学校では、約500人の子ども達が学んでいます。彼らはキラキラ輝く笑顔で迎えてくれました。金銭的な理由から教科書はありませんでしたが、どの子にも夢があり、熱心に先生の話の聞いてはメモを取っていました。ここでは文房具は高価でなかなか買えず、不足していました。それでもボールペン1本、ノート1冊を大切に使う彼らの姿が心に残りました。

日本へ帰り、この学校のことをクラスの子も達に話すと、フィリピンの子も達の物を大切に作る姿に驚いただけでなく、自分達の周りには必要以上にモノが溢れていることにも気づきました。そして彼らに文房具を届けたいという願いから、学校や地域で文房具を集める活動が始まりました。

校内放送、ポスターや新聞作り、地域でのチラシ配りなどアイデアを出し合い、どの子も自分の得意分野で活動に参加しました。大勢の人の協力のおかげで、現在ダンボール3箱に収まらないくらいの文房具が集まっています。

物資を送ることが最善の支援の方法ではないのかもしれませんが、子ども達に「互いに対等な関係であること」をどう伝えるか、現在私が感じている課題です。しかしこの活動の中で、子ども達が自分達にできる「何か」を見つけやってみたことに意味があったのではないかと考えています。そして彼らがいつかまた海外貧困問題と向き合ったとき、「他人事でない、自分もつながっている」と感じてくれたら幸いです。



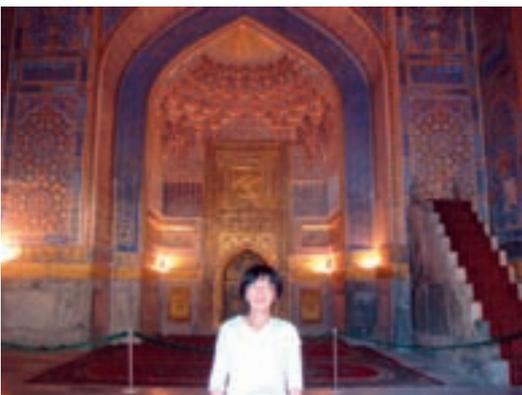
▲地域の方が寄付して下さった文房具を手に、嬉しそうなお赤穂東小の子もたち

◆教育を通じて「知識」から「行動」へ

むろい みちこ
清泉女学院大学 心理コミュニケーション学科 室井 美稚子 教授

国際理解や異文化間理解、それに開発教育といったコンセプトが学校に導入されてから、楽観的かもしれませんが「地球村の一員」「地球市民の一人」という価値観が若者のうちに定着しつつあるように感じます。

小学校を訪れると当たり前のように、海外と何らかのつながりのある児童がいて、先生たちはその子をクラスに多様な文化を運んでくれるインフォーマント(情報提供者)としても大切にする風潮が出てきました。長野市内のある小学校では外国語活動の時間に英語だけでなく、転校してきた児童の母語である中国語も入れながらの授業が行われました。つまり国際交流のために、いろいろな国のゲストに接するだけでなく、クラスメイトの持つ文化や経験をシェアするのです。



▲ウズベキスタンのサマルカンドでイスラム文化に触れる室井先生

清泉女学院大学の学食にはTable for Twoというヘルシーなメニューがあり、30円分が開発途上国の子どもの食事になります。学校や会社で可能な「行動」です。私はツーリズムも教えていますが、豪華ホテルや旅行会社におのみ参加者のお金が落ちるのではなく、地元の人々と交流するスタディーツアーに若者の関心が寄せられています。

小学校や中学校では「知識」「スキル」「態度」と言った3要素、高校や大学ではさらに「価値観」や「行動」につなぐことができる力が求められています。幸い私たちの住む長野県の駒ヶ根にはJICAがあり、世界各地の情報を提供してもらえたり、経験豊かな人を派遣したりしてもらえます。みなさん、これを生かさない手はないと思いませんか。

地域づくりに国際協力の経験を

～訓練所開所30周年記念 公開シンポジウム開催～

駒ヶ根青年海外協力隊訓練所は開所30周年を記念して、10月3日、長野市の「ホテル信濃路」で公開シンポジウム「地域づくりと国際協力」を開催しました。県内自治体の担当職員をはじめ、国際協力に携わる方や元協力隊員ら約70名が参加。国際協力に関する活動や経験、知識を日本国内の地域づくりにどう活かすか考えました。

はじめに名古屋大大学院国際開発研究科の西川芳昭教授の基調講演があり、人口減少や過疎化が進む日本の農山村の現状を解説された後、外部者の視点を持つ国際協力体験者がその経験を地域に活かすことの必要性が指摘されました。さらに「日本に限らず、開発途上国でも住民が自主的に地域開発に取り組もうとする事例が増えている」とし、その際、協力隊員やそのOB・OGらが「地域づくりファンリテーター」として活躍することに期待感が示されました。



▲基調講演する名古屋大大学院の西川芳昭教授

引き続き行われたパネルディスカッションには、協力隊のパラグアイOBで南信州名産「市田柿」の通信販売などを手がける「かぶちゃん農園株式会社」(飯田市) 代表の鍋木武弥さん、ニカラグアOGで地域の伝統文化を基盤としたエコツーリズム確立を目指す飯田市職員の小林美智子さん、JICA草の根技術協力事業「ムルファン村(パキスタン)りんごで村おこしプロジェクト」を実施する飯島町国際協力会会長の橋場みどりさん、JICA青年研修事業を継続して受け入れている長野県世界青年友の会事務局長の三原静子さんの4氏がパネリストとして登壇。国際協力に対する思いや地域との関わりが述べられました。

会場からパネリストへの質問も相次ぎ、活発な意見交換が展開されました。国際協力と地域づくりの関わりを考える良い機会となりました。



▲活発な意見交換が行われたパネルディスカッション

訓練所の一日

様々な職種で世界各国に派遣されるボランティアは、仕事に関する他のにも趣味や特技を持っています。その専門技術や趣味、特技を活かせるのが生活技法講座です。

この講座は訓練中、唯一ボランティア自身の手で企画、運営される講座です。講師も全てボランティア。これから直面する任国での生活を快適にする工夫—例えば、汚れた水を浄化したり、魚をさばいたり—、任国で日本文化を紹介するための技—書道、生け花、着付け—、物のない中で物をつくる技—布でわらじを作ったり、オープンの代わりにダンボールでパンを焼いたり—、こんなユニークな講座が同時に開講されます。

過去に訓練を受けたボランティアがこの講座用に作成したレジュメが、まるで「おばあちゃんの知恵袋」の

No.20 ～生活技法講座～

ように代々受け継がれ、これを元にして講師初体験に挑むボランティアもいます。任国の人々に伝え教え、共に企画することもあるボランティアたち。この講座は任国での活動の予行演習とも言えるでしょう。



▲日本文化の紹介に向けて企画された書道教室

お国自慢レシピ

ウルグアイはラテンアメリカの中でも生活水準が比較的高く、サッカーのワールドカップ初代優勝国としても知られています。町並みはまるでヨーロッパのよう。そんな国出身のファン・カルロスさんに日本の大豆を使った料理を紹介していただきました。

創作ウルグアイ料理 ポジョまめ

ウルグアイは南アメリカ南東部に位置する国です。北と東にブラジル、西にアルゼンチンと国境を接しており、南は大西洋に面しています。チョリソ(ソーセージ)やステーキなど肉料理が有名。またイタリア移民が多いためスパゲッティ等の pasta 類も広く食べられています。今回はその中でも「ポジョまめ」という料理を紹介します。



「ポジョまめ」とは日本の美味しい大豆を使って、ファン・カルロス先生がお国料理をアレンジしたもので、「ポジョ」は鶏肉、「まめ」は大豆を意味します。

今回はコメとの組み合わせですが、パンやスパゲッティとも、とても合います。また冷蔵庫の残った野菜など入れ、お好みでアレンジしてご自身だけの「ポジョまめ」にしてもOK。是非お試しあれ!!!

作り方

1. ナベに油を入れ、カットした鶏肉を5分程度中火で焼く
2. 玉ねぎ、にんにく、ピーマンを加えて4分程度いためる
3. トマト、白ワインを入れ、具が浸る程度にお湯を注ぐ
4. ブイヨンを入れる
5. 中火で約20分煮込む
6. マッシュルーム、大豆、バジルを加え、さらに10分程度煮込む
7. 皿にご飯とポジョまめをよそい、上にパセリを散らして召し上がれ!

ポジョまめ

材料 (2~3人分)

- 鶏もも肉(2~3cmにカットする).....600g
- 大豆(缶詰).....250g 1缶
- ピーマン(さいの目切り).....2~3個
- 玉ねぎ(さいの目切り).....1個
- トマト(出来れば缶詰)ダイスカット...400g 1缶
- マッシュルーム缶(スライス).....125g 2缶
- バジル.....少々
- にんにく(みじん切り).....3~4かけら
- パセリ(みじん切り).....少々
- オリーブオイル.....少量
- ブイヨン.....7かけら
- 塩・コショウ.....少々
- 白ワイン.....少量
- お湯.....少量
- 日本米またはインディカ米.....2合

レシピの主は 誰から?

ファン・カルロスさん

4年くらいJICA駒ヶ根で語学講師として働いています。南米・ウルグアイ出身で日本には1991年に初めて来ました。神奈川県で海洋学を勉強し博士号を取得しました。料理は大好きで、特にウルグアイ名物のバーベキューは大得意!豚肉・鶏肉・牛肉・ソーセージ何でも美味しく焼いちゃいますよ。



第16回みなこいワールドフェスタ開催



▲毎回大好評の「地球の料理教室」。今年のレシピはウルグアイの家庭料理

秋の伊那谷を国際色に染める「第16回みなこいワールドフェスタ」が10月18日から10月25日、盛大に行われました。「みなこい」は上伊那地域の宮田村、中川村、駒ヶ根市、飯島町の4市町村の頭文字をとったもの。駒ヶ根青年海外協力隊訓練所、駒ヶ根市、駒ヶ根協力隊を育てる会、駒ヶ根青年会議所等で結成した実行委員会が、約半年にわたりイベントの準備をしてきました。

最初の行事となった「地球の料理教室」では、40の方が南米・ウルグアイの料理に挑戦。また、「みなこい」地域出身ボランティアの帰国報告会では、文化財保護隊員としてケニアで活動した氣賀澤博徳さん(駒ヶ根市出身)と理数科教師隊員としてマラウイに赴任した唐澤国洋さん(飯島町出身)のお2人が、写真や絵などを交えて体験談を披露しました。

クライマックスは25日、JR駒ヶ根駅前の大通りを会場とした「国際広場」。タイ、ニジェールなど世界各国の料理が食べられるレストランコーナーや、JICAボランティアが任国で使用する外国語学習体験ブースなどが設けられ、会場は国際色に染まりました。特設ステージではネパールの「ナマステ体操」やアラブのベリーダンスなどが披露され、訓練中のJICAボランティアも参加して、イベントを一層にぎやかに盛り上げました。



▲ワールドステージでは訓練中のJICAボランティアも大活躍!

ボランティア 奮闘レポートリレー

report_50 シニア海外ボランティア
ラオス たけうち しげる
繊維マーケティング(上田市) 竹内 茂さん

ラオス人民民主共和国

面積：24万 km²
人口：580万人（2006年世銀統計）
首都：ビエンチャン
住民：低地ラオ族（60%）他、計49民族
言語：ラオス語
宗教：仏教

（外務省HP：各国・地域情勢より）

私は2009年1月にラオスの首都ヴィエンチャンに赴任しました。ラオスは「海なし国」でメコン川沿いの平野部と山間地からなり、タイ、カンボジア、ミャンマー、ベトナム、中国に囲まれ、地理的には長野県と似通っています。首都といえども非常に面積も人口も少なく、中心部からほんの少し行けば全く静かな街です。国民は穏やかな性格であり、治安は比較的良好です。

私はラオス国立商工会議所の傘下組織である、ラオハンディクラフト協会において、マーケティングを担当しています。ラオスの商工業の大きな柱の一つに手工芸品産業があり、今後この業界が発展するには、積極的な製品輸出が不可欠です。そのような状況の基、活動内容は海外市場の調査や情報収集、生産・販売業者に対し助言、提言等を行うことです。

これまでの活動実績は、日本市場に対するアンケート調査、協会会員に対する「マーケティングの基礎」セミナー実施、製品に対する改善クリニック、ハンディクラフトフェスティバルの開催等です。活動上の問題点は、皆さんがお互いに切磋琢磨して物事を向上させようという考えが乏しいこと、ブランドを確立させるとか、消費者ニーズを確実に商品に反映させるという考え方がまだ十分ではない等があります。これらの点は、私の残りの任期中に少しでも改善したいと思います。



▲赴任直後のラオス語研修でラオ大学教授と写る竹内さん（右）



report_51 青年海外協力隊員
マラウイ からさわ りえ
村落開発普及員(駒ヶ根市) 唐澤 理恵さん

マラウイ共和国

面積：118万m²（北海道と九州をあわせた面積）
人口：1,428万人（2008年：世銀）、人口増加率2.5%（2008年：世銀）
首都：リロングウェ
住民：バンツー系（主要部族はチェワ族、トゥンブーカ族、ンゴニ族、ヤオ族）
言語：チェワ語、英語（以上公用語）、各部族語
宗教：人口の約50%がキリスト教（その他イスラム教、伝統宗教）

（外務省HP：各国・地域情勢より）

私はいま、アフリカのマラウイ共和国で村落開発普及員として活動しています。配属先は首都リロングウェと南部の商業都市ブランタイアのほぼ中間ンチェウ県にあるウトンダ地域病院です。この病院は通常の医療のみならず地域住民の生活向上のため、養蜂・養殖・果樹栽培・土壌流出防止などさまざまなプロジェクトを展開しています。

私の活動は、病院スタッフ及び地域住民に対して有機農業の普及を行うために堆肥の作り方の指導やその堆肥を使った野菜栽培のデモンストレーション、HIV/AIDS 陽性者グループメンバーなどに対する栄養改善のためのモリンガという栄養価の高い植物の普及、湿地帯の有効利用のための農民に対する稲作の講習会開催、巡回指導、試験栽培などです。病院スタッフは私の活動に対して協力的でスタッフとともに普及活動を進めることができます。

生活は電気がないのでソーラー発電、料理は七輪のような器具で炭を使って行っています。慣れれば電気がない生活も楽しいものです。また、毎週火曜日にマーケットが開かれ遠くはモザンビークから人が集まってきて、この日ばかりはいつも静かなウトンダもにぎやかになります。周りのマラウイアン（マラウイ人）に助けられながら毎日充実した生活を送っています。



▲テーラーさんと一緒に。マラウイアンは服をオーダーメイドします

行ってらっしゃい!! 長野県出身・新ボランティアのみなさん

長野県出身のボランティア計12名が12月下旬から順次、それぞれの任国へ出発しました。
(敬称略。かっこ内は派遣国名/職種/出身市町村)

【青年海外協力隊】



おおのだ まさひろ
大野 雅洋さん
(ザンビア/理科数教師/長野市)

現地では子供たちに勉強を教えるだけでなく、ともに考え、ともに学び、日本にないものをたくさん吸収してきたいと思います。応援してくれる人たちへの感謝を忘れずに、いってきます!



はせべ み
長谷部 あゆ美さん
(チリ/青少年活動/長野市)

大学を卒業したてのフレッシュマンです!国際協力に興味を持ったきっかけは、長野オリンピックの一環で行われた一校一国運動でした。経験も浅く、不安はありますが、ボランティアをするというよりは、お互いを高め合うことを目標に、砂漠の真ん中で元気に活動していきます。



きたはら やすゆき
北原 靖之さん
(ブータン/上下水道/安曇野市)

「幸福王国」と呼ばれているブータンへ派遣され、上下水道という職種の主に上下水道を担当する事になります。人間にとって大切な「水」を、いろんな角度から支援できればと思っています。任国、また今後の自分の為にも、今まで経験してきた事を120%出して2年間活動してこようと思います。



ひたち まみ
日達 真美さん
(ニジェール/感染症対策/原村)

サハラ砂漠が国土の3分の2を占め、世界で最も暑い国のひとつ、ニジェールでマラリア対策を行う予定です。現地に住む方々の思いを大切に、一人でも多くの人が健康に生活できるよう共に活動したいと思っています。応援よろしくお願いします。



こいずみ れい
小泉 麗さん
(バヌアツ/小学校教諭/長野市)

バンジージャンプの起源となった儀式が有名なバヌアツで、小学校教諭として算数を中心に活動をする予定です。現地の学校の様子を知り、現地の人々と共に学んで、現地の人たちのためになる活動ができたらと思っています。2年間精一杯頑張ります。



みやじま たつや
宮嶋 達也さん
(セネガル/野菜栽培/白馬村)

住民自らがJICAプロジェクトによって建設された給水施設を維持管理できる体制を確立するため、その一環として節水栽培やその他のコミュニティ活動に携わる予定です。念願の一步とともに、この経験を生かして、皆が十分に食べることを目標とした活動に携わっていきたくと思っています。



すのはら けいすけ
春原 圭佑さん
(スリランカ/バレーボール/上田市)

22年間長野県から出たことのない私。初めての一人暮らしがスリランカとなりました。海外でしかできない経験があるはずと、今回参加を決意しました。子ども達にバレーを教えながら、自分自身も成長させてこようと思います。応援よろしくお願いします!!



むかいかみ ようこ
向上 陽子さん
(ウズベキスタン/看護師/茅野市)

首都タシケントから西に750km。ウルゲンチという小さな町にある救急病院で看護の質の向上という部分で活動する予定です。異文化の中での生活、沢山のひととの出会いが今からとても楽しみです。信州発!元気にいきます。

【シニア海外ボランティア】



さとう としはる
佐藤 利春さん
(スリランカ/食品加工・流通/飯田市)

愛知の道の駅での商品開発や南信州での営農支援などの経験を生かし、スリランカの人たちに対して農産加工品や手工芸品で特産品を作り、生計向上のお手伝いをするのが私の役割です。一年中暑い任国で長野県の四季の素晴らしさを語ってきます。



ひかけ ゆみこ
樋掛 裕美子さん
(ウルグアイ/地域保健医療システム/駒ヶ根市)

首都よりバスで7時間、標高100mの温暖な牧草地帯、リベラ県に派遣予定です。今までの経験を土台にして、地域の方々から学び、「気づき」を大切に活動したいです。応援してくれる家族や皆様方に感謝の気持ちを込めて、公私共に有意義な2年間を過ごしたいと思います。



なんば あきろう
難波 昭朗さん
(パナマ/渉外促進/佐久市)

パナマ人との相互交流を促進し、目標案件、「学校施設の改善と維持、管理のノウハウの伝達」が達成されるよう道筋を整えることが役割です。かつて大西洋と太平洋がパナマ運河によって結ばれましたが、日本とパナマもしっかりと手を携えあうことができると期待しています。



みずの よしのり
水野 良紀さん
(チリ/マーケティング/松本市)

チリ南部ロス・ラゴス地区の州都プエルト・モン市に派遣されます。同市の経済開発課に配属し、経済・市場調査に携わります。大学で専攻したスペイン語と民間企業で学んだ国際業務を任地において生かす機会をいただき感謝しています。

国際協力推進員

はじめまして
びやじま あきこ
美谷島 晶子さん



▲ Bangladesh で活動していた時の美谷島さん。これからはふるさと・長野県がフィールドです

南北に広い長野県。「国際協力」をあの山の向こうまで届けたい。そんな思いで北のJICAの顔になるのが、長野県国際協力推進員です。県庁内にある(財)長野県国際交流推進協会のJICAデスクに11月下旬、着任した新推進員を紹介します。

川と平野の国、Bangladesh から、山国長野に帰ってきて半年強、やはり山に囲まれてホッとするのは、信州人の血でしょうか。

混沌の国で人々のエネルギーに負けまいと格闘していた2年間は、日本の静けさの中で思い返すとまるで夢のようです。でも夢ではなかった証拠に、思い返せば限りなく出てくるひとつひとつの体験と、2年間の思いを人に伝えたい!という思い。私だけでなく協力隊OBの方はみな同じような思いで帰国するのではないかなと思います。

Bangladesh の村で人々から感じた生きる力、生きる自信。日本にいたとき長い間求めていたのはここにあった!と思いました。帰国後は、「伝える」ことをベースに、社会を生き生きさせることに携わりたい、その思いで推進員に着任致しました。

人の力が連携していけば社会に働きかけていけるはず、そのことは協力隊経験から得た信念です。地域のマンパワーをつなげて育てて大きくしていけるよう、長野の皆さんと歩んでいきたいと思っています。よろしくお願いします!

JANUARY

1月

6日(水)

平成21年度第4次隊派遣前訓練開始 (3/11までの65日間)

11日(月) 15:10-17:00

公開講座「国際関係と日本の国際協力」(講師: 廣野良吉氏/成蹊大学名誉教授)

12日(火) 13:00-14:50

公開講座「JICAボランティア事業の理念と目標」(講師: 伊藤隆文氏/JICA青年海外協力隊事務局長)

13日(水) 13:00-13:50

公開講座「JICA事業概要」(講師: 永田健氏/JICA青年海外協力隊事務局課長)

18日(月) 15:10-17:00

公開講座「技術と開発のかたち」(講師: 中村尚司氏/龍谷大学教授)

30日(土) 15:10-17:00

公開講座「異文化の理解と適応」(講師: 木村秀雄氏/東京大学大学院教授)

FEBRUARY

2月

17日(水) 19:00-21:00

コンサート「地球のステージ」(場所: 駒ヶ根訓練所/地球のステージ事務局)

24日(水) 15:10-17:00

公開講座「ニッポンの知恵から学ぶ~日本の開発経験~」(講師: 矢島亮一氏/NPO法人「自然塾寺子屋」理事長)

MARCH

3月

11日(木)

平成21年度第4次隊派遣前訓練修了

がんばれ!! 長野県出身JICAボランティア!

JICAボランティア派遣実績

平成21年10月31日現在

①青年海外協力隊員数

派遣中 42名(内女性31名)
帰国 602名(内女性265名)
累計 644名(内女性296名)

③日系社会青年ボランティア数

派遣中 0名(内女性0名)
帰国 17名(内女性9名)
累計 17名(内女性9名)

②シニア海外ボランティア数

派遣中 8名(内女性3名)
帰国 32名(内女性6名)
累計 40名(内女性9名)

④日系社会シニアボランティア数

派遣中 1名(内女性0名)
帰国 2名(内女性0名)
累計 3名(内女性0名)

編集後記

新年、あけましておめでとうございます。国際協力の思いを伝えるべく、今年も長野県中を駆け回りたくと考えています。どうぞよろしくお願いいたします。

学校を訪れ、途上国の話や異文化理解ワークショップを行うと、「遠い国に興味を持つようになっただけでなく、他国を知ることで身の回りを客観的に見つめられるようになった」との感想をよく頂きます。同じようなセリフ、実は帰国したJICAボランティアの口からも頻りに聞かれます。「日常」を離れることで、はじめて見えた「日常」が、子どもたちやボランティア経験者には驚きであり新鮮なんだろうと思います。

こんな体験を長野県にいながらできるJICAの開発教育支援事業。興味を持たれた方、お気軽にご連絡ください。(塩)

お知らせ(お問い合わせは駒ヶ根訓練所担当まで)

◆地球のステージ

このステージ最大の魅力は、美しい音楽と映像を通し、スクリーンに登場する人物と本当に出会ったかのような感動を与えてくれるところです。様々な環境下でたくましく生きる人々の姿に勇気が湧いてきます。

学生の皆さん、小さなお子様のいらっしゃるご家族の方も、是非ご来場ください。(要予約、入場無料)

日時: 平成22年2月17日(水) 19:00~21:00

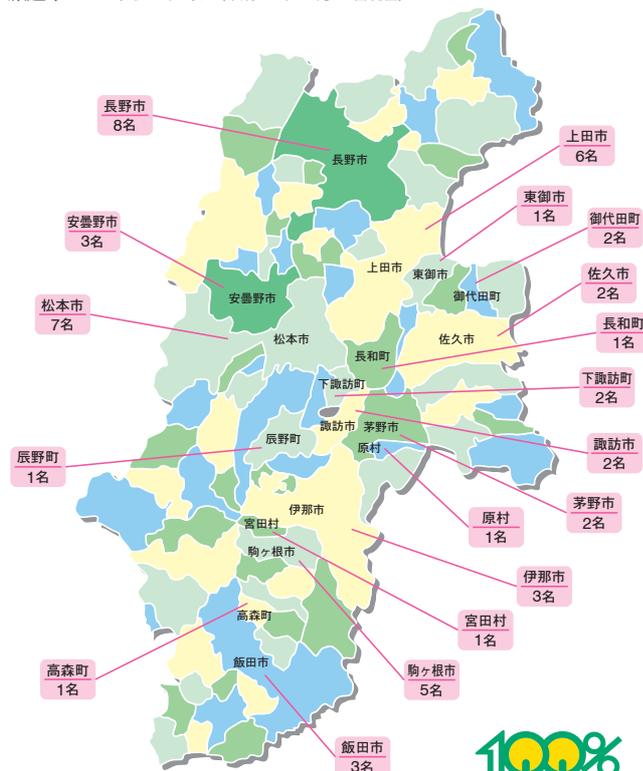
場所: 駒ヶ根青年海外協力隊訓練所 森のステージ

◆公開講座

JICAボランティア派遣前訓練の講座に参加しませんか? 異文化理解、日本の国際協力、JICA事業概要など、様々なメニューで皆様の来所をお待ちしております。お気軽にお問い合わせください。

◆公開講座の聴講を希望される方は、2日前までに駒ヶ根青年海外協力隊訓練所・公開講座担当まで、ご連絡ください。なお、講師の都合で日程が変更となる場合もありますことを予めご了承ください。

派遣中JICAボランティア(平成21年10月31日現在)



古紙100%再生紙

信州発



独立行政法人 国際協力機構
駒ヶ根青年海外協力隊訓練所

〒399-4117

長野県駒ヶ根市赤穂15

TEL.0265-82-6151(代)/FAX.0265-82-5336

E-mail/jicakjv@jica.go.jp

http://www.jica.go.jp/komagane/index.html

